

## 【多摩丘陵・私の出会った生き物たち 1】

### < 冬 の 蝶 >

桑原紀子

青空に誘われて冬の朝、散歩に出かけた。広袴の山沿いの道を行くと、斜面に大きなヒサカキの木がある。(もしかして……)と、枝を見上げて葉裏をさがすと、いた、いた。ヒサカキの葉裏に、一頭の蝶が銀白色の羽をたたんで静かに越冬していた。羽の裏の色から、ウラギンシジミという名前をもらっているが、表の羽は、雄はこげ茶に赤の模様、雌はこげ茶に水色の模様の美しい蝶だ。羽の形も少し違うが、越冬中は羽を広げることはないので、雄雌の区別はつけにくい。



蝶は卵や幼虫や蛹の形で越冬するが、蝶の姿のままで冬を越すこんな種類もいる。

春までの数ヶ月を、ほんの少しの雨水を飲むだけで、同じ葉裏につかまって風雨に耐えるウラギンシジミの姿は、荒海をゆく小さな白いヨットのようだ。春が来る前に力尽きて落ち

てしまうものも多いが、ヒサカキの花が咲くまで、しっかりとつかまっているのを見たことがある。越冬に成功して、無事飛び立った後、葉裏に蝶の足の爪痕が残っていて、生命の強さに心打たれる思いがした。

越冬場所はヒサカキのほか、椿や山茶花、モチなどの常緑樹の葉裏だけど、いつか、間違えて我が家の庭のアケビの葉裏で越冬を始めた事があった。ハラハラしながら見守っていたが、ある風の強い日に葉っぱごと吹き飛ばされてしまった。

生き物にもこんな失敗があるのだ。

クズやフジの花を食べて育つウラギンシジミは、多摩丘陵にいる身近な蝶だ。ちょっと気をつけて探してみると、西緑地や住宅の庭木の葉裏でひっそり春を待つ姿に出会うかもしれない。